

日本語多義構文の効果的学習順序とその教材 開発に関する認知言語学的研究

尾谷, 昌則 / ODANI, Masanori

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2011-05

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 27 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19720125

研究課題名(和文) 日本語多義構文の効果的順序とその教材開発に関する認知言語学的研究

研究課題名(英文) A Cognitive Linguistics Study on Japanese Polysemous Constructions and their Treatment in Japanese Textbooks.

研究代表者

尾谷 昌則 (ODANI MASANORI)

法政大学・文学部・准教授

研究者番号：10382657

研究成果の概要(和文)：「全然」「なので」「てゆうか」「けど」といった日本語表現を取り上げ、その意味や用法の変遷に関して、青空文庫にある近代日本語小説や太陽コーパス、2ちゃんねる掲示板などの書き込みデータから調査・検証した。そして、その意味や用法が変化した原因について、認知言語学や構文文法、語用論といった視点から説明を試みた。

研究成果の概要(英文)：I picked up some Japanese expressions such as *zenzen*, *nanode*, *tteyuuka*, *kedo*, the meanings and usages of which have changed in these 100 years, and made some investigations into how they change their meanings and usages through various corpus data like novels on “Aozora-Bunko”, “Taiyo corpus”, and BBS data on the web. Based on these data, I finally explained how and why new meanings and usages have grown from the viewpoint of Cognitive Linguistics and Construction Grammar.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	300,000	90,000	390,000
総計	2,300,000	360,000	2,660,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：構文、多義、意味、変化、学習順序、教材開発

1. 研究開始当初の背景

研究開始時、私は留学生に対する日本語教育科目を多く担当しており、市販の日本語教材に関していつも不満に感じていた。それは、複数の意味・用法を持つ語彙を教える場合に、基本的な意味・用法しか教えずに先へ進んでしまうことであった。例えば接続詞のケドは、基本的意味が<逆接>である。しかし、我々日本人は「先日の件だけど、どうなった？」のようなく前置き>用法も日常会話で多用しているし、最近では、何かを依頼する際に「道を教えてほしいんですけど。」のように

文末で終助詞的に使用する場合もある。これらは使用頻度が非常に高いにもかかわらず、後々まで教えられないことはない。確かに、一度に複数の用法を教えれば学習者の負担を大きくするというデメリットもあるが、日常生活における使用頻度(=学習者のニーズ)が高い表現も同時に教えた場合のメリットや学習効果についてはほとんど研究されていない。留学生は、実際に日本人が上記のような用法でケドを使用する現場を何度となく経験するため、いつも「どうして依頼するときにケドを使うのか？」と疑問に感じると

いう。また、従来の基本的な用法と、近年新しく生まれてきた用法との関係（どうしてそのような意味・用法が生まれたのか）についても知りたがる。それが、留学生と同じ年頃の日本人（いわゆる若者達）が使用している日本語であれば、知りたい・習いたいという思いは一層強くなる。そこで、そういった多義表現の中でも特に近年生まれた新しい用法に着目し、その意味・用法の変化を論理的かつ実証的に研究し、それらを反映させた教材を作成する必要性があると考えた。

2. 研究の目的

上に示したような問題意識から、本研究の目的は次の3点である。

(1) 「けど」「全然」「てゆうか」「ぼい」などの多義表現を取り上げ、それらの意味・用法の変遷を調査し、その実態を明らかにする。

(2) それらの意味・用法が何故、そしてどのようなプロセスで変化していったのか、認知言語学（特に文法化）の視点から合理的な説明を与える。

(3) 上記(2)で明らかになった要因やプロセスに基づいて、母語話者の言語知識を構文ネットワークとして記述する。

(4) 上記(2)(3)に基づいて、日本語の多義表現の各用法を連続して学習しても負担にならないよう配慮した外国人向け日本語教材を開発する。

3. 研究の方法

上記目的(1)を達成するため、コーパスデータを活用した。利用したコーパスは、市販のものでは「太陽コーパス」、「日本語話し言葉コーパス」、「戦時中の話し言葉（書籍付録のCR-ROM）」、オンライン上のもものでは「KOTONOHA 日本語書き言葉均衡コーパス（デモ版）」、「国会議事録検索システム」などである。さらに、青空文庫の小説テキストをダウンロードし、初出年によって10年ごとに分け、簡易の書き言葉コーパスを独自に作成した。小説の初出年を可能な限り調べたので、言語使用の実態・変遷を細かく追えるデータベースになっている。使用した検索ツールはKWIK Finderであるが、適宜KH coderも使用した。

上記(2)(3)については、近年の言語変化（文法化を含む）の研究成果を丹念に調べ、Ronald W. Langacker のいう「主体化（Subjectification）」や「動的用法基盤モデル（Dynamic Usage-based Model）」、「抽象化

と精緻化に基づくカテゴリー化」、山梨正明のいう「融合ネットワークモデル」、パウルのいう「類推」といった概念を用いて、意味変化や構文ネットワークの分析を行った。

さらに、一般的に認められている変化要因の他に、言語がコミュニケーションのツールとして使用されていることを重視し、語用論的な視点（例えばポライトネス理論）もなるべく取り入れるよう務めた。そして、そういった要因を動的用法基盤モデルに組み込んで考察した。

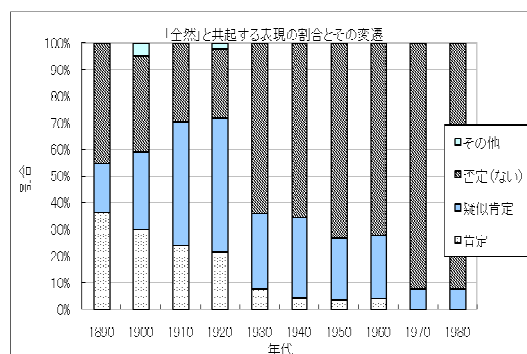
ここまでは最初の3年間で完成させるつもりであったが、予定通り順調に研究を進めることができたと言える。

(4)については、研究最終年度（4年目）を充てるつもりであった。試験的に自作の文法学習用プリントを作成し、自分の授業で使用しながら受講生（留学生）の意見を徴集するつもりであったが、諸事情（後述）により達成できなかった。

4. 研究成果

研究対象に選定したのは、①否定の副詞「全然」、②逆接の接続詞「けど」を含む構文、③話題転換機能を獲得した「てゆうか」、④接続化した「なので」の4つであったが、それらの意味・用法の変遷プロセス・変化要因については十分な研究成果を上げることができた。①②は個別の論文として発表し、さらに①～④は著書『構文ネットワークと文法』としても出版できた。

①については、1900年以前は肯定文とも否定文とも「全然」が共起しており、その割合はほぼ同じであった。しかし、1910年以降、表面的には肯定文であっても、意味的には否定的なニュアンスで使用されている使用事例（＜疑似肯定用法＞と命名）が多く見つけた。それらの影響で、「全然」は何かを否定する際に使用するもの」という固定観念が生まれたのだと推察される。その結果、1930年代以降は雪崩をうったように否定文へと傾き、1970年代には肯定用法がほぼゼロになった。（以下のグラフを参照。）



一方、近年爆発的に増えている（復活しつつあると言ってもよいかもしれない）肯定文での使用例を収集・分析すると、表向きは肯定文だが、相手の持っている文脈想定を否定するという語用論的な意図で使用されていることが判明した。例えば、「私の作ったカレー、美味しい？」と尋ねられた場合に、「全然美味しいよ。」と答えるのがこれに相当する。文法的には「美味しいよ」という肯定文であるが、聞き手は「美味しくないと考えているのではないか」という危惧（文脈想定）を抱いているため、その想定を否定するために「全然」が使用されているものと考えられる。その証拠に、そのような文脈想定が一切存在しないような場合、例えば（何も質問されていないのに）いきなり「このカレー、全然美味しいね」と言うのは非常に不自然である。ゆえに、近年見られる肯定文での使用は、潜在的には否定文であると言える。ただし、節・文レベルの否定ではなく、より高次の文脈レベルの否定になっている点で、明らかに用法の変化が起こっていると言える。

文レベルから談話レベルへの変化（拡張）は、②「けど」、③「なので」、④「てゆうか」にも共通して見られた。「けど」による逆接は、例えば「彼は背が高いけど、僕は（背が）低い。」というように、従属節と主節にある述語レベル（この場合は「高い」と「低い」）に矛盾や対立が見られるのが典型的な使用例であるが、対立・矛盾といった具体的な逆接の意味が背景化し、前件をきっかけに後件へと話題を展開する談話的機能だけが残ったもの（例えば「昨日の件だけど、どうなった？」のような使用例）が近年多用されている。

このように談話的機能を持つに至るという変化は、これまでの文法化に関する研究でも Halliday & Hassan(1976) が命題的 (ideational) 用法からテクスト的 (textual) 用法への傾向を指摘しており、近年では Trougott(1988) も同種の指摘をしている。さらに Langacker(1999) は、際立っていた客体的な意味が背景化することで、その背後に潜んでいた主体的な意味が相対的に際立ってくるという変化を意味表現の主体化 (Subjectification) として一般化しているが、「けど」の変化はそのどちらの指摘にも合致する事例であると言える。

③の「てゆうか」についても、「けど」と同種の変化が起こりつつあると推測される。本来は「AというかBというか」という句レベルの表現で、その意味は「どちらが適切か、判断に迷っている」とことを示すものであった。しかし、近年では「映画に行こうよ。」-「てゆうか、カラオケ行かない？」のように、相手の発話に対して自分の発話を関連づけ

ながら談話を展開する用法が多用されている。この場合、「迷っている」という意味合いは無くなっており、むしろ相手に対する反論や代案を示すために用いられている。その点では、先の「けど」のように客観的な意味が背景化しているわけではないのだが、句レベルから談話レベルの機能へと拡張している点は大きな共通点である。

④の「なので」についても、元は「彼は優秀なので、出世も早い。」のように一文レベルで使用される接続助詞であったが、近年では「彼は優秀だ。なので、出世も早い。」のように、文を二つに独立させて使用されるケースが多発しており、接続詞としての地位を築きつつある。残念ながら、接続詞としての「なので」の初出は明らかにできなかったが、「ので」が接続詞として使用されており非常に面白い用例を発見することができた。夏目漱石の『それから』（1909年初出）に「相手は評判の悪い無頼の青年であつた。ので高木は母とともに長井の家へ……」という事例が見つかったのである。ついで泉鏡花の『人魚の祠』（1916年初出）にも「此方むきに少し仰向けに成つて寝て居ます。のですが、其が、黒目勝な雙の瞳をぱつちりと開けて居る」という事例が見つかった。これらは、「な」こそ無いものの、「なので」が接続詞化するプロセスを考える上では非常に有益なデータになると思われる。

接続助詞から接続詞へと変化した例は、「なので」以外にも「だから」や「なのに」にも見られ、古くは「だのに」なども見られた。逆接の接続詞については、戦前は「だのに」の使用が多く見られたが、1960年代から盛んに「なのに」が使用され始めた。助動詞の部分が「だ」から「な」に変化したわけであるが、順接の接続詞もその影響を受けたために、「ので」に「な」を付けた形の「なので」が発生したと考えられる。

さらに、語用論的な観点から発生原因を考えるなら、「なので」の発生原因が適度なポライトネス意識であると考えられる。理由を言うのに「ですから」や「ですので」は丁寧すぎるが、「だから」では丁寧さが足りない。そこで、両者の隙間を埋める存在として「なので」が便利に用いられていると考えられる。これは、「なので」の使用文脈から明らかになった事実である。

以上、上記目的(1)～(3)については十分な成果が得られたと言えるが、残念ながら上記目的(4)については、研究成果を上げることができなかった。理由は2つある。一つは、大変ありがたいことに、これまでの自分の研究成果を交えて認知文法と構文文法に関する著書を出版する機会を与えられたため、その執筆活動で多忙になったためである。早くから本研究と平行して著書出版の準備を進

めていたのだが、結果的に最終年度にそのしわ寄せが行ってしまった。

もう一つの理由は、最終年度に所属大学を異動したことで、留学生クラスの担当を外れたことである。自分の授業で使用しながら教材開発を行う予定だったので、その機会が思うように得られなかった。

しかし、上記(1)～(3)の目的は十分に達成することが出来た。目的(4)を達成できなかったことは誠に残念であるが、(1)～(3)の研究成果を著書として刊行できたことで、十二分にその補填が出来たと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 尾谷昌則、「構文の確立と語用論的強化：「全然～ない」の例を中心に」、『日本語用論学会 第9回大会発表論文集』、査読有、2007年、pp.17-24.

[学会発表] (計1件)

① 尾谷昌則、「装定用法における並置形容詞に関する一考察」、第62回東北英文学会(2007年/11月17、18日 於山形大学)

[図書] (計2件)

① 尾谷昌則・二枝美津子、研究社、『構文ネットワークと文法 -認知文法のアプローチ-』、2011年、322ページ (pp.1-111, pp/241-294)

② 児玉一宏・小山哲治(編)、ひつじ書房、『言葉と認知のメカニズム』、2008年、663ページ (pp.103-115)

[その他]

① 講演 題目「変わる日本語 変わらぬ想い」(東北学院大学AVセンター学術講演会、2010年11月1日、於東北学院大学 泉キャンパス)

② NHK文化センター 教養・文芸講座 「言霊が伝える意味 ～ことばとコミュニケーション～」の講師を務める(主催：NHK文化センター 仙台泉支社、期間：2008年10月～12月)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾谷 昌則 (ODANI MASANORI)
法政大学・文学部・准教授
研究者番号：10382657

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし